

神恵内村たつ姫共創プラットフォーム(北海道神恵内村)

## 相次ぐ公共交通の撤退。 住民の移動手段をいかに確保するか

INTERVIEW



### 村内移動だけでなく、村外移動も

北海道の積丹半島西側に位置する神恵内村では、村内で唯一のハイヤー会社が廃業したことに加えて、村内と岩内町をつなぐ路線バスが運転手の確保が困難である等の理由から2024（令和6）年9月で廃止の方針を示すなど、住民の外出に支障が生じかねない状況となっている。村ではハイヤー会社の廃止を受け、外出支援の一環として、村内移動用のオンデマンド交通「たつ姫号」の運行を開始したが、「通学や通院など岩内町や泊村などへ通うケースも多い」（高橋昌幸村長）というように、住民の日常生活は村内だけで完結しない。そこで、2022（令和4）年10月17日より、実証実験として従来のたつ姫号に加えて、村外移動用の「どらごん太号」の運行を開始した。どらごん太号はたつ姫号同様に自宅から乗車できるが、村外について

は泊村茅沼診療所・岩内ターミナル・岩内協会病院の3つの乗降場を設定し、路線バスの運行時間の間を埋める形での運行を実施している。「利用実績は2022（令和4）年12月12日時点でたつ姫号が381件、どらごん太号が52件となっており、冬期に入り積雪とともに利用者は増加傾向になります。利用者に対してはアンケートを実施しており、その結果を共創プラットフォーム内で共有していますが、他の病院や商業施設など村外の乗降場所を増やしてほしいという声も届いています。商業施設については、村内の商工業の活性化も推進する必要があり、村全体の経済バランスを考えると悩ましいところです」（高橋村長）。

### 人口800人弱の村で事業は成立するのか

利用者は増えつつある状況ながらも、事業化

への最大の課題はファイナンスの確保である。「村の人口は800人弱（道内で2番目に少ない）であり、運賃収入だけの維持は成り立ちません。また、他の交通手段がなくなっている状況のなかでも、住民が十分なサービスを受けられるように、移動手段を何としても確保しなければならない事情もある。行政としてはなるべく利用者の負担を抑えた形でできる形を考えていく必要があります」（高橋村長）。

「神恵内村たつ姫共創プラットフォーム」は神恵内村が主体となりながら、共創パートナーとして神恵内村で洋上風力発電への参画を目指す再生可能エネルギー事業者のINFLUX.INCをはじめ、村内のDXをサポートする富士通Japan株式会社、そして車両の提供を行うトヨタレンタリース札幌が名を連ねる。

「神恵内地区にあった温泉施設が閉館して、

住民の外出機会が減少したことを受けて、村内DXの一環として、集会所に住民を集めて『VRマーケット』を実施しています。VR空間に商店を設置して、ライブコマースのような形で商品を紹介して、集まった皆さんに買っていただくのですが、その商品のお届けにたつ姫号を使うという取り組みを始めています。そのほかにもたとえば、岩内町の薬局と提携して診療所の処方箋に従って薬の運搬ができないかなど、人だけでなく『物を運ぶ』ことで収益を上げる可能性を模索しています。また将来的には、地産地消の再生可能エネルギーを活用したEV車（電気自動車）の導入など、さらなる共創も視野に入れていきます。村内の交通事情を考えれば行政としても後に引けない状況であり、事業化を実現したいと考えています」（高橋村長）。

